

# お薬のしおり

## クラミジア感染症について No.40 (H17.1)

東京医科大学病院 薬剤部

最近、新聞やテレビで、性(行為)感染症(STD: sexually transmitted diseases)という言葉を目にすることが多くなってきました。社会環境の変化に伴い性風俗の多様化、性行為の低年齢化が進み、性感染症の流行も一般化、低年齢化が著しくなっています。今回は性行為感染症の中でもっとも頻度の高い性器クラミジア感染症についてお話します。

性器クラミジア感染症の主役は C.trachomatis(クラミジアトラコマチス)と呼ばれる直径 300~1000nm ほどの病原体です。クラミジアは性行為によるパートナー感染や出産の際、産道感染により伝播されます。男性ではきっかけとなった性交渉後、2~3週間で排尿時の痛みや尿道のかゆみなどの症状がおこり、女性では排尿時や性交時の痛み、おりものが増えるなどの異変が起きます。しかしながら、細菌に感染しても、女性の約 75%、男性の約 50%で何の症状も起こさないのので、クラミジアに感染した人の大部分は、自分が感染したことに気づかず、医療機関へも受診しないことが多いようです。

女性の性器クラミジア感染症は、男性に比べ症状が少なく軽いため、治療しないで放置してしまう可能性が高くなります。実はこのことが、かなり深刻な問題を起こしてくるのです。放置されている間に、男性パートナーへの感染源となるのは当然のことですが、感染は本人の気づかないうちに子宮頸管内を通過して卵管に入り、さらに骨盤内に大きくひろがって、“骨盤内感染症”をおこし



ます。そのため卵管が閉塞し、かなりの人が、数年のうちに、治りにくい不妊症になってしまいます。また、たとえ妊娠しても“子宮外妊娠”となることもあります。さらに、流産・早産をおこすこともあり、ことに切迫流産のため、低体重児が生まれることが多いことが注目されています。無事出産したとしても、母子感染をおこして、新生児が眼瞼結膜炎や中耳炎をおこしたり、また“重篤な新生児肺炎”になることもあります。そのような、母から子供への母子感染という、次世代にも影響を及ぼす大きな問題をかかえることにもなります。このように、クラミジア感染はあまり目立たないかたちでありながら、女性にとってかなり重大な問題といっても過言ではありません。

一方、男性の性器クラミジア感染症は、放置するといつまでもパートナーへの感染源として菌をばらまくばかりか、自身でも尿道炎から、さらに体の中に入って“精巣上体炎”や“慢性前立腺炎”などをおこすようになります。

クラミジア感染症の治療は、従来、テトラサイクリン系抗生物質の1日2～3回投与、7～14日間程度の薬物治療が必要でしたが、最近1回の内服でも有効率の高いアジスロマイシン(ジスロマック®)という薬が承認されました。そのため飲み忘れもなく、治療も行いやすくなってきています。

自分とパートナーのためにも、尿道がむずがゆくなったり、排尿時に違和感がある、おりものが増えるなどの異変を感じたら、医師や看護師、薬剤師に相談し、すぐに検査を受けましょう。

